

## 詩人たちの原風景—牧水と啄木を中心として—

みなみ  
南

くに 邦 かず 和\*

## 〈文学〉と時代相

「この味がいいね」と君が言ったから七月六日はサラダ記念日

世はまさに、俵万智ブームである。「八月の朝」50首で昭和61年度（第37回）の角川短歌賞を受賞しているこの若い女流歌人（昭和37年生まれ）の第1歌集「サラダ記念日」は発売1年目にして230万部という超ベストセラーとなり、一度倒産した河出書房新社はこの本の出版で立ち直ったとも噂されている。

俵万智はいまや、まぎれもなく当代のスターであり、この5月1日に国税局から公示された高額納税者としての“所得番付”にも顔を出し〈アドリブ短歌〉の元祖として多くの追従者を従えて、そのゆくところにたえずジャーナリスティックな話題をまきちらしている。この俵万智現象に代表されるライトヴァースが、現代における日本文学の一つの方向を示していることは言うまでもない。

また、実力的世代の福島泰樹という歌人（本業は日蓮宗法昌寺の住職）は“絶叫短歌”という新分野を拓きつつあるが、中原中也の詩を短歌に置きかえるなどの興味深い仕事のかたわら〈短歌絶叫コンサート〉という名の全国ツアーを試みるなど、異色の現代歌人として知られている。その歌集は言うに及ばず、ライブのカセットが売れているというそのタレントぶりも、従来のものかきの生態には見られなかった今日的な現象ということができよう。

古代や原始社会にあっては、こうした短詩形（定型）の詩歌は、呪術としての役割を持ち、また、狩りや戦いへの出陣の儀式、豊作祈願、雨乞いなどの、いわば言霊（ことだま）としての威厳と実用性をもつ表白手段であった。しかし、現代にあっては時代風俗をそのまま映した装飾性や手軽なホビーとしての効用をもつ遊びの手段に変わりつつあるようにも思えるのである。

時代相との関連のなかで〈文学〉そのものの変容や文学者の内景を見てゆくと、いろいろ興味つきないものがある。かつて、詩人萩原朔太郎が「弱者の正義」として〈社会に於て何一つ生活の道を知らないような無能な人間、弱者の中の弱者が自己の生存権を大胆に主張し得る唯一の道—芸

術……〉と定義づけていた〈文学—芸術〉が、いまほど社会的に認容され、もてはやされている時代もないかもしれない。

だが、ことし4月の作家田宮虎彦の自殺に象徴されるように、それはこれまで正統であった“純文学”の終焉と、赤川次郎、島田雅彦らに代表される、いわゆる“ライトヴァース”“ポップ文学”の旗手たちの登場と重なる「日本文学」の悲劇の意匠にも見えてくるのである。

ちょうど4年前、私は東京で開かれた国際ペン〈東京大会〉に出席する機会に恵まれたが「核状況下における文学へなぜわれわれは書くのか」をメインテーマにしたこの大会（フランスのアラン・ロブ＝グリエ、中国の巴金、スウェーデンのペール・ウエストベリらの作家がゲスト・オブ・オナーとして招かれている）に来日したアメリカの作家カート・ヴォネガットの「芸術＝坑内カナリア理論」に強い印象を受けている。

炭鉱夫たちは坑内でのガスもれを検出する方法としてカナリアを坑内に持ち込み、そのカナリアの死によって人間の致死量以前のガスを探知するという、つまり、芸術家たちも社会が非常に危険な方向に向かおうとするとき、より早く危険を感知して警報を鳴らす……というロジックである。いかにも“心優しきニヒリスト”と呼ばれている作家らしい寓話的な風刺である。この説には日本の作家井上ひさしなども大いに共鳴して「カナリア・リーグ」をつくらうという提案をしたと伝えられている。

作家小島信夫は、現代における日本文学の衰弱について、戦後しばらくは書くべきテーマがあった。しかし、結核も貧乏もなくなってしまった現代では「敵」の正体が拡散してしまった。もの書きたちは自分の内部の「敵」に向かっていく以外にない……という趣旨の発言をしているが、たしかに、俵万智現象に見る〈文学〉は、外部の「敵」と対峙するのではなく、自分の内なる「敵」を見ずえるのではなく、優しい“自己愛”の〈文学〉へと変質してしまっているように見られるのである。

## 牧水・啄木の生きた時代

明治44年2月3日、若山牧水はこの日はじめて本郷弓町喜之床（この建物は、現在犬山市の〈明治村〉に移築保存されている）の2階に石川啄木を訪ねている。

\*詩人、日本ペンクラブ会員

## 特別講演

「夜、若山牧水君が初めて訪ねて来た。予は一種シニクな心を以って予の時世観を話した。声のさびたこの歌人は「今は実際みんなお先真暗でござんすよ」と癖のある言葉で二度言った……」(啄木の日記)

この日の牧水の啄木訪問の目的は短歌雑誌「創作」への出稿依頼のためであったが、啄木自身にとっては腹膜炎で入院する前日であり、最も生活苦の厳しい時期でもあった。また牧水にとっても宿命の女性園田小夜子との5年近い恋愛に破局が訪れ、健康にも自信を失っている失意の時代であった。「お先真暗でござんすよ……」という25～26歳の青年の言葉は、そのままその時代の暗さを表しており、二人の文学者に共通の暗示的なキーワードでもあったのである。

牧水・啄木の最初の出会いはその前年の秋ごろと思われるが、まさにその時期に「大逆事件」と呼ばれる“大事件”の裁判が進行していた。幸徳秋水を首魁とする“天皇暗殺”の大陰謀(今日では、その事実関係については大きな疑問が持たれている)は、明治43年6月に発覚し、この事件にただならぬ関心を示した啄木は文学上の友人でもあった弁護士平出修から「大逆事件」関係文書を借り出してその真相を知ったという。やがて社会思想詩としての「呼子と口笛」に結実する詩篇が書かれてゆくが、その年8月の東京朝日新聞には「時代閉塞の現状」が発表されている。

友も妻もかなしと思ふらし  
病みても猶  
革命のこと口に絶たねば

啄木

明治44年1月18日「大逆事件」に判決が下り幸徳伝次郎(秋水)、菅野スガら24人に死刑、他の2人が有期刑という、文字どおりの極刑であった。その1週間後には12名が処刑されている(残り12名は特赦で無期懲役に減刑された)。「社会派」の啄木に対して“芸術至上派”の牧水には、反権力や時局批判の作品はほとんど見られないが、この時期に書かれている次の一首がある。

虚無党の一死刑囚死ぬきわにわれの「別離」を読み  
しときく

牧水

若山牧水の処女歌集「海の声」が出版されたのは明治40年7月であるが、この一冊をめぐるさまざまなエピソードがある。先生、先生とおだてられて出版を約束したその業者が雲隠れしてしまい印刷所とのトラブルの挙句、早稲田の恩師であり歌師でもある歌人尾上柴舟に20円を借りてようやく陽の目を見たのが「海の声」であった(その20円はとうとう返さずじまいであったという)。しかし、この「海の声」によって、牧水は一介の学生歌人から脱皮して、文壇的な評価を浴びるようになるのである。



写真一 牧水生家(東郷町坪谷)昭和30年ごろ  
(夕刊デイリー提供)

この処女歌集の出版と同じ時期に早稲田大学文学部英文学科を卒業した若山牧水は、一時期の新聞記者勤めを除いて、正真正銘の“うたよみ”として歌一途の生涯を歩んでいる。

われ<sup>にじゅうろく</sup>二十六歳歌をつくりて飯に代ふ世にもわびしき  
りはひをする

われ歌をうたひくらし<sup>いい</sup>て死にゆかむ死にゆかむとぞ涙  
を流す

牧水

歌こそが生きる糧であり、また唯一の生活源であった牧水の大正15年の“選料”の記録がある(大悟法利雄著「歌人牧水」)。それによると、東京日日新聞30円、国民新聞20円、大阪時事新報20円、主婦之友50円、少年倶楽部20円…など、そのトータルは月320円にも達している。大学卒の官吏の初任給が75円、巡査が45円(朝日新聞社刊「値段の風俗史」から)であった時代のその月収は、まさに重役なみのそれだが、沼津の家の抽斗という抽斗を探しても、一銭もお金がなかったことがあるという長男旅人の記憶がある。牧水と貧乏は生まれながらの双生児であり、早稲田時代からしきりに姉スエの夫河野佐太郎に無心の手紙を出している。

その牧水の貧乏観は、啄木のそれと比較するときわめて楽天的であり、このあたりにも北と南の風土が培った人生観や生活への姿勢の対比が覗かれる。

「<どうしたものか、小生には実のところ貧乏といふものがさほど苦にはならない。よくよく貧乏性に生まれて来てゐるのか、その時その時ですぐ忘れてしまひ得る幸福な性質を持っているのか、その場はとにかく、その前後などを考ふことに於て、さほど苦にならない……>」(「貧乏首尾なし」)

この牧水に比べて啄木の貧乏観は悲壮でさえある。父一禎が宗費滞納で宝徳寺住職を罷免されて以来、貧乏はどこまでも啄木について回る。堀合節子との結婚式に“新郎欠

席”の失態を演じて、友人たちから絶交されるのも、金策のできないいらだちとその体面をとりつくろうための狂言だったと言われている。

「誰か、知らぬ間に殺してくれぬであろうか。寝てる間に！……」と日記に書きつける啄木にとって、貧乏はまさに“親の仇”以上のものであった。啄木自筆の「借金メモ」によると、友人、知人から借りまくったその借金の合計額は1372円50銭にもものぼっている（岩城之徳著「石川啄木」）。

若山牧水と石川啄木、この二人の歌人の出会いと別れは、明治維新以後、急速に近代化の歩みを速め、日清・日露の戦勝に酔いながら“一等国民”としての自負を高めてゆく近代日本と、まだまだ前時代的な無知と貧困をその内側にかかえこんでいた「明治」と呼ばれる時代のなかでの幻灯写真のようなモノクロームの情景として私たちの目に映るのである。

啄木は、明治45年4月13日、27歳の若さで生涯を終えるが、その臨終の枕辺にあったのは、父一禎や妻節子をのぞけば、たった一人若山牧水のみであった（金田一京助もその臨終には立会えなかった）。その2日前の4月11日、牧水は啄木を見舞っている。その時の啄木の悲痛な言葉を、牧水は「石川啄木君と僕」の一文に書いている。

「若山君、僕はまだ助かる命を金のないために自ら殺すのだ。見給へ、其処にある薬がこの2、3日来断えているが、この薬を買う金さへあったら、僕はいま直ぐに元気を恢復するのだ。現に僕の家には1円26銭（あるいは単に26銭であったかと思ふ）の金しかない。しかも、もう何処からも入って来る見込みはなくなっているのだ……」

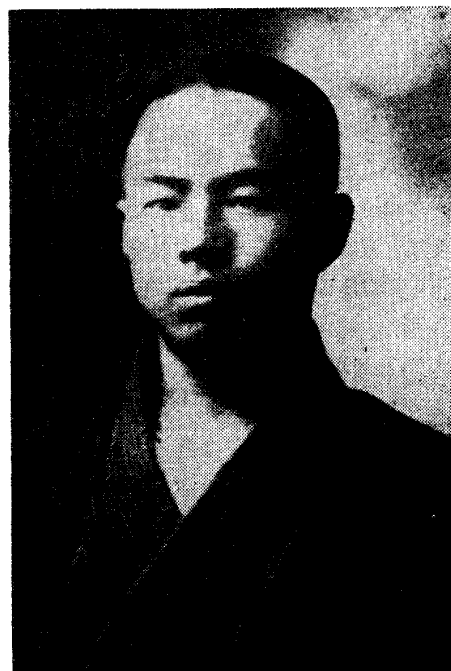
そして、石川啄木はその2日後に死んでゆくのである。その日牧水は、婚約直前の関係であった太田喜志子への手紙の中に「石川啄木君が今朝9時半に死にました。私は独りその臨終の枕もとに坐ってゐたのです。くはしいことが言ひたいが、いま手紙に書くのはいやです……」とその無念の気持を書きつけている。

午前九時やや晴れそむるはつ夏のくもれる朝に眼を瞑じてけり 牧水

### 素顔の牧水～同時代の文学者たち

若山牧水や石川啄木と同時代の文学者たちには、北原白秋や萩原朔太郎など日本の文学史上に大きな地歩を築いた巨星たちが綺羅星のごとくに輝いている。当時、日本文壇の中心にあったのは与謝野鉄幹の新詩社による「明星」であったが、啄木も朔太郎も高村光太郎もその「明星」のなかから出発してきている。その周辺には川路柳虹、野口米次郎、山村暮鳥、前田夕暮、大手拓二、野口雨情、齊藤茂吉らの名前が見える。

そのなかで、牧水や啄木らと同年（1885年）生まれの文



写真一 若山牧水（26歳，明治43年）  
（夕刊デイリー提供）

学者たちを挙げてゆくと

若山 牧水（宮崎）歌人	1928年没	44歳
北原 白秋（福岡）詩人	1942年没	57歳
土岐 善磨（東京）歌人	1980年没	94歳
木下杢太郎（静岡）詩人	1945年没	80歳
武者小路実篤（東京）詩人・小説家	1976年没	91歳
中 勘助（東京）詩人・小説家	1965年没	80歳
野上弥生子（大分）小説家	1985年没	99歳
尾崎 放哉（鳥取）俳人	1926年没	41歳
飯田 蛇骨（山梨）俳人	1962年没	77歳
? 石川啄木（岩手）歌人、詩人、小説家	1912年没	27歳

と、実に多彩な顔ぶれが揃う。また夭折した啄木、40代で死んだ牧水、放哉を除く文学者たちが長命を保ち、野上弥生子はつい先年まで現役作家としての活動を示している。いままた中勘助への関心が高まってきている。

石川啄木については、その生誕100年をめぐって“誕生日論争”が再燃してきたが「明治19年（1886）説」（岩城之徳日大教授ら）と「明治18年（1885）説」（昆豊福教大教授ら）の応酬が続いている。啄木自身の日記、手紙、履歴書を根拠とする「19年説」に対して、金田一京助の所説に裏付けされて戦前の定説となっていた「18年説」もまだまだ根強い勢力を持っている。その「18年説」の理由の一つに「啄木（キツツキ）」というペンネームは明らかに酉年（明治18年）を根拠にしているはずだという見方があるのも面白い。だが、現在の教科書や文学辞典などでの啄木についての記述では明治19年生まれを採用しているようである。

3年前の昭和60年（1985）には、これら文学者たちの生

## 特別講演

誕100年を祝う〈生誕祭〉が、それぞれのゆかりの地で盛大に行われたことは記憶に新しい。若山牧水の場合は全国22か所での〈生誕祭〉行事が展開され、“国民歌人”としての人気を改めて印象づけられた。

地元宮崎県でも、生地東郷町や中学時代を過ごした延岡市を中心に、年間を通してさまざまな記念行事が行われている。私自身も、その東郷町での式典や記念出版としての「若山牧水」(宮崎日日新聞社編)などに顔を連ねているが、その何か所かの会場で聞いた牧水の長男若山旅人氏の“父牧水”を語る言葉が印象的であった。

「目の澄んだ純粋な人だった。「この人なら一生共にしてもいいと思った」と母喜志子は語っていた。コケシのようなバランスのとれない体形で、パンビのように細い足だったが、その足のウラは真綿のようにフワフワしていた。洋服は一切着なかった。……」

その数々のエピソードの中で最も印象深いのは、まだ喜志子との新婚時代(内藤新宿の森本ホテルの2階に住んでいた)、遊郭の女たち相手の仕立物で生計を立てていた喜志子が長押の釘に無雑作に掛けていたその着物の一枚一枚を、牧水がチリ紙でその釘を巻いて掛けなおしていたという話である。旅人氏は牧水の優しさを、旅の途中で一夜の宿を与えてくれた農家への感謝をこめた次の一首で紹介している。

飲む湯にも焚火のけむり匂ひたる山家の冬の夕餉なり  
けり 牧水

その牧水の間像については、同時代の先輩歌人である太田水穂が次のような第一印象をスケッチしている。

「ずんぐりとした恰好をして、顔は黒く円く、どこまでも素朴な厭味のない青年であった。(中略)何かの話の序でに、彼の恋愛の歌などに話が触れてゆくと、あのつぶつぶとした黒い顔が、にわかには汗ばむほどになって恥かしげな眩しい色をぎしてくる……」

また、終生牧水の周辺にあった直弟子の大悟法利雄は、  
「牧水は身長5尺1寸6分(約1メートル56)で13貫(約50キロ)という小男、丸顔で色は黒く、髪は丸刈り、30代からもうあご髯などのぼしていたので実際の年齢よりもふけてみえ、それにいつも地味な和服を着ていたから、どちらかといえば田舎っぽく、風采は堂々とはいえなかった。しかし、いつ逢っても明るい朗らかな童顔で、実に愛想がよく如才がなく、初めての人にも十年の知己のように話し、逢うほどの人をすぐ魅了して、誰からもなつかしがられ慕われて、よく玲瓏玉のような人だと言われたのだ」(「歌人牧水」)

と、親愛をこめて語っている。

この若山牧水とは対照的に、北の詩人石川啄木は、そのふっくらとした色白の童顔と小柄な身体をいつも一群の中

心に置いて、常に自己顕示のポーズを忘れなかったようである。そしてその内面にはしたたかな自負と闘争心を持つ“炎の歌人”が啄木であった。

腕拱みて

このごろ思ふ

大いなる敵目の前に躍り出でよと 啄木

## 牧水と啄木の“原風景”

若山牧水と石川啄木とを比較するうえでの“座標軸”として考えられるものには「出郷の動機」「家系と家族」「女人遍歴」などがあるが、同じ時代を生きた者同志としての多くの共通項とともに、また、大きな両者のひらきが実感できるファクターも数多い。

けふもまたこころの鉦をうち鳴しうち鳴しつあくが  
れてゆく 牧水

石をもて追わるごとく

ふるさとを出でしかなしみ

消ゆる時なし 啄木

この二つの歌がもつ隔たりは、旅へのあこがれ(それは女人への渴仰にもダブっている)に「こころの鉦をうち鳴しつ……」その生涯を貫ぬいた牧水と、破産状態からの“故郷喪失”を余儀なくされた啄木の「出郷の動機」についての端的な違いを物語っている。その一方で、牧水も啄木も、同じような“思郷”のおもいのなかですぐれた多くの“望郷歌”を書いている。

ふるさとの尾鈴の山のかなしさよ秋もかすみのたなび  
きて居り

日向の国むら立つ山のひと山に住む母恋し秋晴れの日  
や 啄木

かにかくに渡民村は恋しかり

おもいで山

おもいで川

やはらかに柳あをめる

北上の岸辺目に見ゆ

泣けとごとくに 啄木

若山牧水は、宮崎県ではじめて種痘を実施したといわれる先駆的な医師健海を祖父に、これも医者であった立蔵の長男として生まれており、年上の女きょうだいに囲まれて成長している。啄木もまた姉妹には生まれた柔弱なひとり

息子の環境に育っており、その父一禎が僧侶であったということにも、坪谷と渋民という封建性の強い村落社会の中産知識層に出自を持つ共通性が見られる。

牧水にも啄木にも、華やかな女人遍歴（プラトニックな恋愛感情を含めて……）がある。「凡そ牧水の世にうたわれる名歌の数々が殆んど若い青春の恋情の上に歌われている。」（歌人安永蒨子）といわれるように、牧水にあまたの名歌を書かせたのは、その周辺を彩った女人群像であったといってもいい。

ふるさとのお秀が墓に草枯れむ海にむかへる彼の岡の  
上に 牧水

牧水がその親友鈴木財蔵（歌人平賀春郊）に「細島の秀さんが死んだよ……」と哀切をこめて書き送った最初のマドンナ日高秀子から、園田小枝子、石井貞子（のちに牧水の友人三津木春影の妻となる）を経て太田喜志子に終着する牧水の愛の歌は、そのどれもが“絶唱”と呼ぶにふさわしいものである。中でも人妻であった一歳年上の園田小枝子との熱愛のなかで歌集「別離」を中心にした数々の名歌が生まれている。タドンとニックネームされたあの素朴純情の人牧水が、かくも激しい恋の歌を書いたのである。

山を見よ山に日は照る海を見よ海に日は照るいざ唇を  
君

ああ接吻海そのままに日はゆかず鳥翔いながら死せ果  
てよいま

山奥にひとり獣の死ぬるよりさびしからずや恋の終り  
は 牧水

女人渴仰の“ベアトリーチェ型”の牧水に対して、啄木の女性観は自己中心的な強引な求愛のかたちであり、その「ローマ字日記」に示された赤裸々なセックス観には、女性を従属的にしか見ない男尊女卑の思想が窺えるのである。それはむしろ、一面では社会主義的な思想に爪先立ちで近づこうとしていた啄木の人間的な稚さとその独善的性格の表われと言えるのかもしれない。しかし、その恋愛歌には妻節子や、理想の女性橘智恵子、あるいは“小奴”などの、ある日ある時の映像が刻みこまれているのである。

砂山の砂に腹這ひ  
初恋の  
いたみを遠くおもい出ずる日

やはらかに積れる雪に  
熱てる頬を埋むるがごとき

恋してみたし

よりそひて  
深夜の雪の中に立つ  
女の右手のあたたかさかな 啄木

### 牧水に見る〈酒〉と〈旅〉

飲むなと叱り叱りながら母がつぐうす暗き部屋の夜の  
酒のいろ

父もまた飲む男かな焼酎の百杯乾して子に働むなり  
牧水

牧水には約300首の“酒の歌”があるといわれているが、その人生は〈酒〉抜きにしては語れない。高弟大悟法利雄の証言（「歌人牧水」）によると、朝2合、昼2合、晩6合が牧水の酒の“定量”であったという。まさに1日1升の酒である。一番飲んだ時には1日2升5合という記録がある。この〈酒〉は牧水の罪ではなくその家系の責任でもあるようだ。祖父健海の妻はつくり酒屋の娘でその名前がカメ（甕と亀に通じる、いかにもノンベエの名前である）、夫をして「おまえと寝ると酒樽のそばへ寝ているようだ」と嘆かせたほど酒好きの女性であったらしい。その息子である父立蔵も歌のとおりであり、その母マキも、山仕事にはいつも酒を持参していたというほどの酒好きである。

母マキと酒につながるエピソードがある。大正14年の九州旅行の途次、郷里から老母と2人の姉を別府に呼び寄せて遊んだおりに牧水は

「酒気が断えると頭も手足も自由が利かなくなるので終日わたしはこれを用ゐていた。（中略）「阿母さんわたしも随分ともう酒を飲んできたからこれから少し慎しもうとおもふよ」母の返事は意外であった。「インニヤ、酒で焼き固めた身体ちゃカル、やっぱり飲まにゃいかん」これには皆笑った。わたしも笑ったが、涙がこぼれそうであった…」

病む母を眼をとちおもへばかたはらのゆふべの膳に酒  
の匂へる 牧水

牧水がふるさとの坪谷に帰ると村中の酒屋から「豪傑」という酒が消えたという。牧水は「豪傑」が好きじゃゲナ……と聞いた村人たちが「豪傑」を持参して若山家を訪れ酒盛りをはじめたからである（夕刊デイリー〈記者手帳〉から）だが、その牧水の酒は泣上戸の酒でもあった。

女ども手うちはやし泣上戸泣上戸とぞわれをめぐれる  
牧水

## 特別講演

酒はしだいに牧水の身体を蝕んでゆくのである。

く

足音を忍ばせて行けば台所にわが酒の壺は立ちて待ち  
をる

いざ行かむ行きてまだ見ぬ山を見むこのさびしさに君  
は耐ふるや 牧水

妻が眼を盗みて飲める酒なれば<sup>あわ</sup>焔て飲み噎せ鼻ゆこぼ  
しつ 牧水

これらの名歌は、すべて旅の途上に生まれている。そして、牧水は、その自らの子供たちに、旅人、みさき(岬子)、真木子、富士人と、旅情につながる名前をつけているが、牧水のその〈旅〉は「出かける」のではなく「帰ってゆきたいのさ……」と喜志子夫人に言わせている回帰の〈旅〉でもあった。

そして、酒はついに牧水の生命を奪ってしまう。昭和3年9月17日、牧水の死はまだむし暑い晩夏の死であったが、その遺体は2日後の葬儀まで腐敗しなかったという。死因は「急性腸胃炎兼肝臓硬変症(肥大性肝硬変)」である。その牧水が書いた最後の一首は、これもまた悲しい“酒の歌”である。

## 二人の“国民歌人”

酒ほしさまぎらはすとて庭に出でつ庭草を抜くこの庭  
草を 牧水

「その死後50年が過ぎて、啄木のように広汎な読者を持っている文学者は、漱石を除けば外にはない。」(山本健吉)、「若山牧水は、明治・大正・昭和の三代を通じてもっとも歌人らしい歌人であった。極めていい意味に歌人といふものを解して、彼は歌人以外の何ものでもなかったと言い得る。」(土岐善麿=哀果)と評されている石川啄木と若山牧水は共に“国民歌人”の名にふさわしい存在といえよう。

〈酒〉の牧水はまた〈旅〉の牧水でもあった。

頼み来し／その酒なしと／この宿の主人言ふなる  
破れたる紙幣とりいで／お頼み申す隣村まで／一走り  
行て買ひ来てよ  
その酒の来る待ちがてに／いまいちど入るよ温泉(い  
でゆ)に  
壁もなき吹きさらしの湯に

薄幸の生涯でありながら、歌人・詩人・小説家・評論家(別の見方からはジャーナリスト、あるいは思想家)としての実に多面的な活動分野を示しながら、その完成を待たずに夭折した啄木に対して、牧水は文字どおりの歌人であった(内には厳しい批評精神を持ち、当時の歌壇批判や歌集評などに健筆をふるっている)。その生前に14冊の歌集を持つ牧水と、ただ1冊の詩集「あこがれ」のみしか残し得なかった啄木の、今日における文学的評価は“文学全集”などの編集姿勢に端的に反映されており、啄木の圧倒的な読者人気に比べて、牧水のマイナーな印象はぬぐえないところである。

「枯野の旅」の題名で書かれている牧水の詩篇である。群馬県の暮坂峠に立つ牧水像は、牧水の旅姿をほうふつとさせる立像であるといわれるが、尻っぱしよりにワラジ履きが、旅の歌人牧水の正装であった。牧水が生涯に作った短歌は8000首とも9000首ともいわれるが、その中に2286首もの旅の歌があるという。大悟法利雄の研究によると、14歳(延岡高等小学校)の時、母マキ、義兄河野佐太郎らの“金比羅参り”(この時は大阪にまで足を伸ばしている)に強引についていった初旅以来、牧水の旅は通算1674日にも及んでいる。実に4年半、その生涯の10分の1に近い“旅の空”である。

しかし、“旅の牧水”にその真骨頂を見せる牧水歌碑は、全国に120~130点在するともいわれ“国民歌人”としての衰えない人気を示しているともいえそうである。岡山県二本松には若山牧水・喜志子・旅人の夫婦、親子による三つの歌碑がある。

牧水の早稲田時代からの親友である北原白秋は、次のように語っている。

≪若山君ぐらいたまた旅の好きな人もあるまい。フラリと行ってはフラリと帰ってくる。彼は全く旅に出なくてはならなくなって旅に出る。それは酒を飲まずにいられなくなって酒を飲むのとおなじである。酒の牧水、旅の牧水ほど牧水の真骨頂をあらわしたものはない。酒は彼を活気づけ、旅は彼を洗ひそそぐ……≫

幾山河こえさりゆかば寂しさのはてなむ国ぞけふも旅  
ゆく 牧水

あくがれの旅路ゆきつつ此処にやどりこの石文のうた  
は残しし 喜志子

若くしてゆきにし夫のかたわらに永久の睦みをよるこ  
ばむ母は 旅人

(原稿受理 1988.7.15)

山ねむる山のふもとに海ねむるかなしき春の国を旅ゆ